

善隣

No.571 通卷838

2026年（令和8年）5月1日発行（毎月1日発行）

2026

5



善 隣 目 次 2026年 5 月号

公開講演会記録

中帰連とは、鬼から人間に戻った戦犯たち ……………芹沢昇雄 2

支援することの難しさ ……………村上一枝 11

会員彼是

東京電力福島第一原子力発電所訪問記 ……………福島靖男 19

陶陶俳壇

……………馬場由紀子 23

中国ウォッチング

……………編・訳 上松玲子 24

協会通信 …………… 26

2026年 5 月の行事予定 …………… 27

みんなの写真館

ホイアの夜景／姜晋如 ……………表紙／26

羽根木公園／村田嘉明……………表4／26

善 隣 第571号 通巻838号

2026（令和8）年5月1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051
FAX 03（3573）1783

発行人 井出亜夫

編集人 朝浩之

編集協力 古田紀子、加藤浩志

印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

中帰連とは、 鬼から人間に戻った戦犯たち

NPO法人中帰連平和記念館事務局長・理事 芹沢昇雄

1. 「中帰連」とは

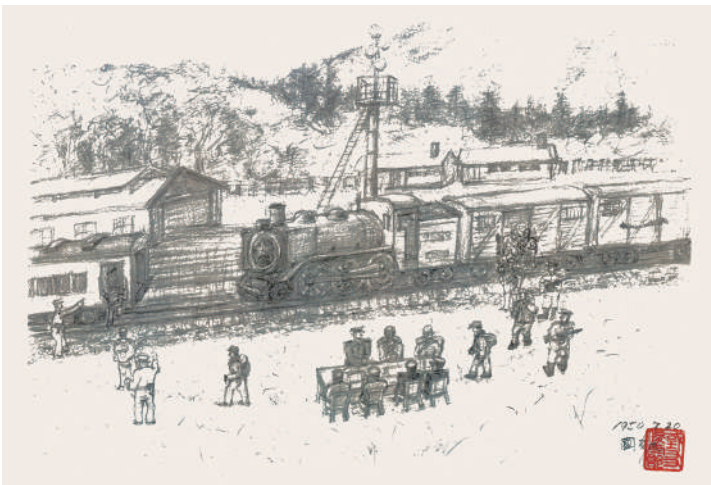
中帰連とは正式には「中国帰還者連絡会」（以下、中帰連）と言います。戦後60万人以上がシベリアに抑留され、約1割の6万人余りが犠牲になったと言われています。

その中から5年後の1950年に969人が旧ソ連から、前年に独立したばかりの中国に「戦犯」として引き渡されました。ソ連側では3段に仕切られた貨車でしたが、中国側では客車が待ち、医師と看護婦が「体調の悪い人はいませんか？」と車内を回り、温か

い食事まで用意されました。戦犯たちの中にはこの格差に「中国によいことをしたから？」と、まだ洗脳が解けない者もいました。

国境の「綏芬河」で中国に引き渡された彼らは「牡丹江、哈爾濱、長春」を経由し3日かけて遼寧省の「撫順戦犯管理所」に収容されました。この移送は民衆からの襲撃を避けるため極秘で行われました。撫順駅から管理所までの数十分の徒歩移動では、八路军は戦犯の隊列に背を向け、銃を外に向けて戦犯を保護しました。

一方で戦後も八路军と戦った元日本



①戦犯は綏芬河でソ連から中国へ移管（中帰連・国友俊太郎 画）



兵140人が逮捕され山西省の「太原戦犯管理所」に収容されました。彼らはこの2カ所に収容され、1956年の「特別軍事法廷」で赦され、3回に分けて帰国し、翌1957年に立ち上げたのが「中帰連」です。

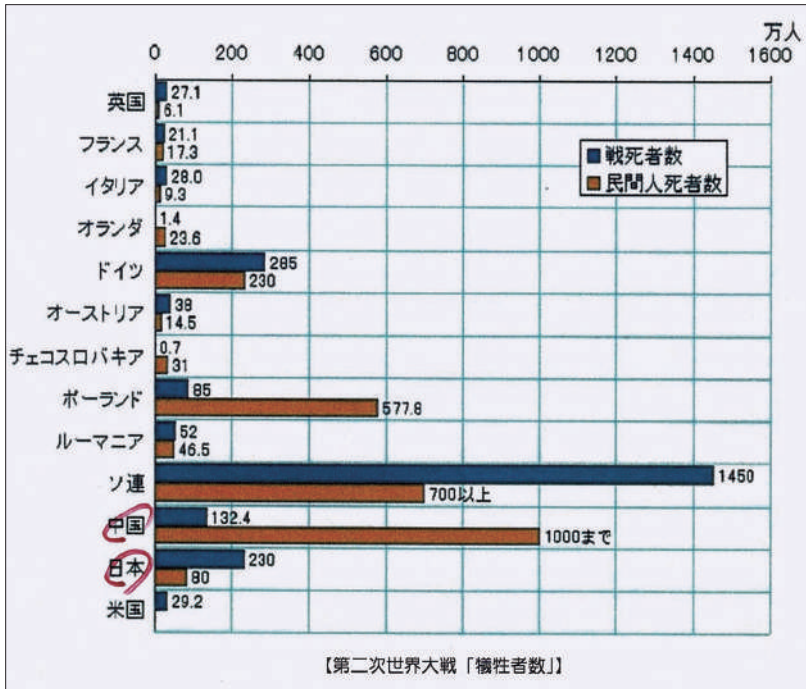
2. 日本は戦争の被害国か

日本では特に8月になると「原爆、

者は約310万人と言われますが、中国では少なくとも市民1000万人以上が日本軍に殺害されました。それはヨーロッパのユダヤ人犠牲者600万人の比ではありません。さらにアジアでは2000万人余りもが犠牲を強いられたのです。その皆さんには何の責任もなく、その戦争を誰が始めどう責任を取ったのでしょうか。

沖繩、東京大空襲、開拓団……」など戦争の被害・悲劇を訴えますが、日本は戦争の被害国でしょうか。日本の戦争は鎌倉時代の「元寇」以外、「日清、日露、日中、太平洋戦争」と全て自ら始めた侵略戦争でした。しかも、その日中戦争は、張作霖の爆殺も満鉄爆破も関東軍の「自作自演」で始め、太平洋戦争も敵基地攻撃で始めたのです。

あの戦争で日本人犠牲



②「戦死者統計」(『東京新聞』2006年8月15日)

米軍の沖繩本島上陸の1か月半も前の45年2月14日、昭和天皇は近衛文麿の元総理から「勝利ノ見込ナキ戦争ヲ之以上継続スルコトハ全ク共産党ノ手ニ乗ルモノト云フベク、従ツテ国体護持ノ立場ヨリスレバ、一日モ速ニ戦争終結ノ方途ヲ講ズベキモノナリト確信ス」(『昭和天皇実録』第33、31頁)と「敗戦上奏」を受けました。しかし、天皇は「もう一度戦果を挙げてからでないとなかなか話は難しいと思う」と却下したのです。

その後、東京大空襲、沖繩、広島、長崎、開拓団などで50万人以上の市民が犠牲になりました。近衛は敗戦後の12月16日に自死しましたが、天皇は戦後一言の謝罪もせず「人間宣言」を発し、メディアは「一億総懺悔」(天皇陛下負けてごめんなさい)と国民に責任転嫁したのです。

8月8日のソ連参戦でも関東軍は国民を守るどころか、731部隊や満鉄関係者などと特別列車まで組み真っ先に逃亡したのです。そして追っ手を遮るために橋まで爆破し、逃避行の開拓

団はどれほど犠牲を強いられたことでしょうか。

3. 関東軍は中国で何をしたのか

関東軍の「奪い尽くし、焼き尽くし、殺し尽くし」を、中国では「三光作戦」と呼びました。生体解剖、

生体実験は「731部隊だけではない」と、太原の潞安陸軍病院の軍医だった湯淺謙さんは、自ら実行したと証言し本も出しています。

生き埋めや水責めの拷問、強姦、百人斬り競争……など、当時、中国人や朝鮮人は人間ではなく、何をして許されました。軍は補給が間に合わず、「現地調達」と称し食料など現地住民から略奪し、家具はたき火の材料にしました。

強姦に抵抗する女性を「生意気」だ



③「百人斬り競争」(『東京日日新聞』1937年12月13日)



④平頂山惨案記念館 (展示品)

と、井戸に投げ込み、その女性の子どもが母を追って自ら井戸に飛び込むと、その後には手榴弾を投げ込んだとの証言もあります。初年兵教育の仕上げには度胸をつけさせるために、中国人を銃剣で刺し殺す「実的刺突」を強制しました。また行軍の先頭に中国人を歩かせ「人間地雷探知機」に使うことなどもしました。

中国から接収した撫順炭坑が抗日ゲリラに襲われたときは、住民は知っているながら教えませんでした。軍は「写

真を撮る」と言って平頂山部落の住民を集めました。しかし、三脚の黒い布を取るとそれはカメラではなく、機関銃で、それが一斉に火を吹きました。3000人余りを殺害し、崖を爆破して遺体を埋めました。戦後、中国政府

がその遺体の一部を掘り起こし「平頂山惨案記念館」として保存しています。この現場では731と違い数名の生存者から証言を聞くことができました。哈爾濱の「731部隊」では中国人を「マルタ」(丸太)と称し1本、2本

と数え、生体解剖、生体実験、凍傷実験、細菌兵器開発……などで、3000人余りを虐殺しました。その731部隊は8月8日のソ連参戦で、一人の生存者も証言者も残さず、マルタを全員殺害し、特別列車で逃げ出したのです。石井四郎部隊長はその資料と引き換えに米から免責されました。

4. 管理所での生活

撫順戦犯管理所は日本が中国人收容のために建てた監獄でしたが、中国は日本人戦犯を收容するというので、莫大な費用をかけて暖房設備や風呂、食堂などを整備して戦犯を受け入れました。

当初、戦犯らは20名ほどが入る部屋に、鍵を掛けられ收容されました。彼らは最初に部屋の壁に貼ってあった「戦犯遵守規定」に目がとまり、俺たちは戦犯ではなく捕虜だと抗議しました。59師団長の藤田茂（中将）も自分のことを棚に上げ、管理所長に「君たちは国際法違反だ」と抗議していま

したが、内心では処刑を恐れていました。

管理所では何の強制労働も学習もなく自由に過ごし、職員が一日2食のコウリヤン飯しか食べられない状況で、彼らは白米と中国人数人分の十分な食事を与えられました。職員たちの中には家族を殺害され、たった一人になったものもいました。職員は悔しくて米をとがずに炊いたり、野菜を洗わないで調理したり、食缶を足蹴にしたりし

ました。

管理所は周恩来の直轄管理で、それを知った周恩来は「復讐や制裁で憎みの連鎖は切れない。罵倒も殴打も許さない。日本人の習慣と人道を守れ」と職員に厳命しました。戦犯たちは白米などが出たことで「これが最後の晩餐か?」と思い、また焼却炉の煙突が建つと「あそこで焼かれるのか?」と疑心暗鬼で自殺者も出ています。

しかし、彼らはまだ反省ができず、余ったご飯で白い碁石を、土と混ぜて黒い碁石を造ったりして遊び呆けていました。それでも職員から叱責されることはなく「よく考えてください」と言われるだけでした。管理所はあくまで自身で気付き反省するまで待ったのです。旧ソ連では強制労働、学習がありました。人間は強制では変わら

ず、そう簡単には変わりません。その人道的待遇が変わることなく続くことで、「処刑されないかもしれない?」と少し心に余裕が出てくると、過去を振り返り反省・認罪するようになっていきました。しかし、その認罪



⑤当初收容された部屋（『人道と寛恕』北京・外文出版社、1957年）

のタイミングや深さはそれぞれで、位の高い人ほど罪を認めるのは遅くなりました。上官は命令するだけです、兵士は自分で殺害しているからです。

5. 反省が進む戦犯たち

何の強制もされず自由にできている自分たちが「中国で何をしたのか?」、それでも赦してもらえないことで、徐々に自らの「加害・虐殺体験」などを認罪するようになっていきました。反省が進むと部屋の鍵が外され、所内で自由に交流できるようになりました。

義足や眼鏡を造ったり、予防注射や健康診断を受けたり、風呂も定期的に入り健康管理も適切に行われました。図書室もあり、ときには映画会も開かれ、職員との運動会やバスケットボールなどの記録映像もあります。身体がなまると自ら労働を希望し、瓦生産も始めましたが、これは希望者だけでした。



⑥「李徳全女史来日」(『読売新聞』1979年10月31日)

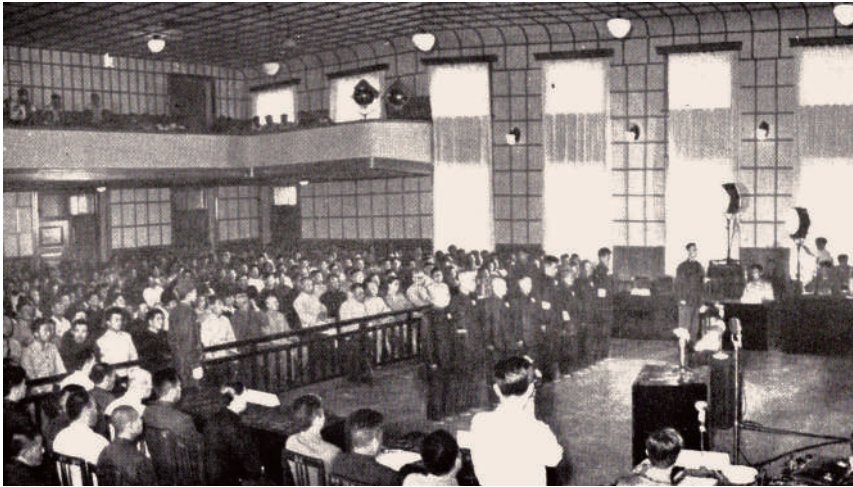
ました。3年目頃までにほとんどの人が自身の加害・虐殺体験を手記に書きました。

国交回復前の1954年には日赤が中国の「紅十字会」の李徳全女史を招聘し、初めて「戦犯名簿」が開示されました。戦後、既に管理所に4年、シベリアに5年、召集から数えると15年近く行方不明だった夫や息子の生存が確認され、家族はどんなに嬉しかったことでしょうか。しかし、既に戸籍を抹消されたり、妻が弟と再婚していたりなどの状況もありました。その後、面会が許されるようになり、日本から面会に行った夫婦の寝室には枕が二つ並べてありました。

6. 特別軍事法廷

1956年に瀋陽と太原の両方で「特別軍事法廷」が開かれ、被害者が自分の傷を見せて証言したりしました。家族全員を虐殺された女性の証言や、溥儀の証言映像や、法廷で戦犯が土下座して被害者に謝罪している映像もあります。

図書の差し入れもあり、希望者だけの「勉強会」も始まり、東大で哲学を学んだ戦犯が講師になり『資本論』なども読み、徐々に自身で過去を振り返っていきました。その場で、もの凄いい議論になり、「あなたの指示があったから私はやった!」と部下に言われ、「あ、そうか」と気付く上官もい



⑦特別軍事法廷（前掲『人道と寛恕』）

1062人の戦犯のうち起訴されたのは僅か45人で、死刑も無期もなく、しかも刑期には管理所での6年、シベリアでの5年の計11年が算入され、満期前に帰国を許されました。他全員は「起訴免除」として釈放されたのです。満州国國務院総務庁官だった武部六蔵は病室で禁固20年を言い渡されまし



⑧管理所中庭でのパーティー（前掲『人道と寛恕』）

たが、「病気のため釈放するので帰国してよい」と言われ、号泣している写真もあります。彼こそ生きて帰れるとは思っていなかったでしょう。起訴免除の戦犯たちが管理所に戻ると、中庭のテーブルにビールとつまみが置いてあり「パーティー」の用意がしてありました。そして、職員が戦犯たちの手を握り肩を組み「よかったですね！」と自分のことのように喜んで

くれたのです。「中帰連の証言は嘘だ」と右翼は言いますが、当時NHKが取材している写真もあります。当初、敵対関係にあった戦犯と職員はここまで理解し合えるようになりました。それは中国が赦してくれたことで、戦犯たちが認罪・謝罪し、戦犯たちが反省・謝罪したことで職員も赦してくれたのです。つまり赦しの理解の輪が広がったのです。

7. 帰国

戦犯たちは56年の夏に3回に分けて天津の塘沽港から興安丸に乗り、舞鶴を目指しました。帰国に際しては「新しい服、新しい靴、新しい毛布」に現金50元まで支給され、その50元でお土産を買って帰国しました。港では職員の皆さんが手を振って見送ってくれました。

この規模で被害者が加害者を赦した歴史はなく、甚大な被害を受けながら、中国が「賠償請求権」を放棄しただけでも凄い

ことです。日本は侵略戦争の日清、日露戦争で賠償を取っているのです。私たちはこの事実を後世に伝え「信頼関係」を築いて平和を維持したいと考えています。

8. 帰国後

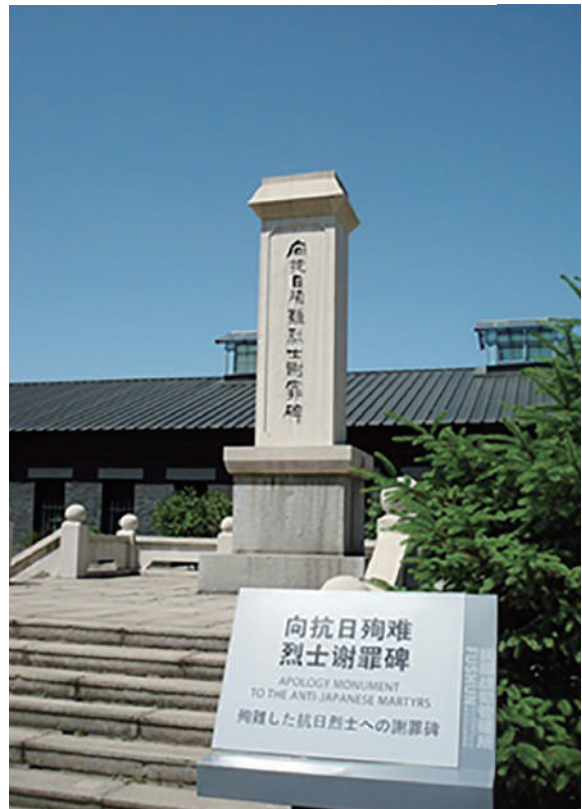
彼らは1956年6、7、8月と3回に分けて帰国しました。しかし、帰国すると「赤、大陸帰り、洗脳者」とレッテルを貼られ、公安警察が就職先にまで押しかけ、そのため「明日から来ないでくれ」などと言われ、多くの皆さんは就職が大変困難でした。



⑨天津・塘沽港の別れ（前掲『人道と寛恕』）

中帰連はその就職情報交流のために、帰国翌年の57年に立ち上げたものです。その後、生活が安定してくることで自身の加害・虐殺体験を証言するようになりました。

2000年に慰安婦問題を裁いた「女性国際戦犯法廷」で加害証言したの中帰連の金子安次さんと鈴木良雄さんでした。しかし、その加害証言部分分をNHKがカットして放送し大きな問題になりました。放送前に金子さん宅にNHKから女性の声で「放送で実名報道していいですか」と確認電話があり、金子さんは「いいですよ、私は



⑩管理所内に建てられた謝罪碑（筆者撮影）

証言者ですから」と答えていました。

9. 「中帰連」解散後

中帰連は高齢のため2002年4月に解散しました。解散式には全国から中帰連の皆さんが集まり、懐かしく再会しました。しかし、その直前に中帰連最後の会長・富永正三さん、最後の撫順管理所長・金源さんが亡くなり、解散式はお二人を「偲ぶ会」ともなりました。

その翌日、私たちは彼らの思いを受け継ぐと「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」を立ち上げ、北海道から九州まで



⑪中帰連解散式（筆者撮影）



⑫「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」結成式（筆者撮影）

10支部を設立し、当時まだお元気だった中帰連の皆さんに「証言集会」をお願いしていました。

しかし、ご本人が亡くなるとその証言活動ができなくなり、またご遺族が彼らの資料を処分する傾向が見られました。私たちは戦争体験者ではなく、その資料を使って後世に伝えるしか方法がありません。

10. 中帰連平和記念館

私たちは彼らの資料の散逸を防ぎ収

集するため2006年11月に川越市笠幡に「中帰連平和記念館」をNPOとして立ち上げました。

目的は中帰連の戦争体験や、鬼から人間に戻った経緯などを多くの皆さんに知ってもらうことと、ジャーナリストや研究者などに必要な資料を提供することです。記念館が開館したことを知った研究者の皆さんが協力くださり、中帰連以外の戦争関連の資料や本を寄贈していただき現状になりました。今まで市民や市民活動団体、内外の研

究者やNHK、中国中央電子台（テレビ）などの取材にも協力しています。

この場所は初代理事長の仁木ふみ子（元日本教職員組合本部婦人部長）が近くに住んでいて、この中古のプレハブ小屋が空いていたのです。札幌在住だった中帰連の大河原孝一副会長が中心になり、ご健在の全国の中帰連の方々に「カンパ」を呼び掛け購入してくれました。ゆえに家賃もかかりませんでした。この場所がなかったらこの運動はできませんでした。ここには中帰連の皆様のお力が詰まっています。

なお、初代の仁木理事長の「戦争と教育は一体」との思いから、「家永教科書訴訟」をともに闘った教育学者の山住正己先生（元東京都立大学学長）の蔵書をご寄贈いただき、「山住文庫」として保存しております。

記念館は2026年11月8日に「20周年集会」を開きますが、この2年間、一切の公的資金は受けず、全て全国のご理解、ご支援くださる皆さんの「会費・カンパ」に支えられて運営できたことに、心より御礼と感謝申し上げます。



⑬NPO 法人中帰連平和記念館（開設2006年11月筆者撮影）

記念館の開館日は「水、土、日」の週3日で、年4回の理事会を開き、会報も年4回発行しています。事務局は事務局長と司書の二人なので、「資料整理ワーキンググループ」を立ち上げています。

中帰連関連を含め100本以上の戦争関連の映像もあり、偶数月の第3土曜日の午後「ビデオ上映会」を開催したり、研究者を含めた「供述書を読む会」なども開催しております。また3年に1回世界各地で開催される「国際平和博物館会議」や、毎年全国交流会が開かれる「平和のための博物館市民ネットワーク」や「戦争遺跡保存全国ネットワーク」などにも参加しております。

11. 周恩来の言葉

「日清戦争以来、日本は我が国を侵略し、人民を傷付け苦しめてきました。我々は深い怨みがあります。しかし、中国と日本との間には2千年に

わたる友好の歴史があります。戦争による不幸な歴史はわずか数十年にすぎません。我々は日本に怨みを持っていませんが、忘れようと努力しています。これからは日中が力を合わせてアジアをよくしていこうではありませんか」（2007年3月19日 NHK「ラストメッセージ 第5集 命をかけた日中友好 岡崎嘉平太」より）
（2025年12月11日・公開講演会）

筆者略歴（せりざわ・のぶお）

1941年東京神田に生まれ、1945年3月「東京大空襲」に遭う。1946年に父が病死、一人っ子の母子家庭となる。高校卒業後、東武鉄道で42年間電車の検査部門で働き、労働組合運動に参加する。2001年定年。

「神戸少年事件」の処分取消しを求め最高裁まで闘う。2006年「NPO 法人中帰連平和記念館」(<https://npo-chuukiren.jindofree.com/>)を設立、事務局長・理事。

げる次第です。

なお、初代仁木ふみ子理事長の後任の2代目は731研究者で慶應義塾大学名誉教授の松村高夫、現在3代目理事長は治安維持法研究の第一人者の小樽商科大学名誉教授の荻野富士夫です。

公開講演会記録

支援することの難しさ

カラ西アフリカ農村自立協力会 村上一枝



はじめに

私にとって「支援する」ことを考えたとき、どのような方法でいつまで、どの程度の支援をするか、余分な支援もよくないし支援不足もよくない、と常に悩んでいました。

しかし、世界の最々貧国と言われる国でも人々は長い歴史を生きてきました。彼らには、彼らの意識で培ってきた生活があります。そのようなところに「貧しさからの脱却、自立した合理的な生活」に変えるような支援をする

ことは、正しいとは言えないと思います。その環境、意識を理解し、尊重した実践に移すべきと思いました。支援とは、そこに住む人たちの生活を活かす無償の手助けであり、人と人、心を通わせ「人の命を守ること」、それこそが私が目指す支援の方向である、と考えました。

生活の一面を垣間見て…

マリ共和国は、1960年に旧宗主国のフランスから独立しました。今は、首都のバマコ市にはホテルが建ち、中

国製の「ジャカルタ」という多彩な塗装のバイクが走っています。国土は日本の3倍でその70%がサハラ砂漠です。20部族がそれぞれの言語を話し、異なった文化を持っています。近年の気候温暖化の影響で農産物の収穫が減少し、貧困は深まり、弱い立場の人々へしわ寄せがきています。特に教育と医療面においては、地方にはその恩恵が行き渡っていません。義務教育制度ですが、学校も十分になく、教師も不足しています。郡に小学校は4、5校、中学校、高等学校はたったの1校です。診療所も1か所です。このような



① マリの農家

状況です。人々は十分な医療を受けることもできず、祈禱師に助けを求めています。「子どもが5歳前に死んでしまうのは、神様が連れて行ってしまふのだ」とあきらめています。日常生活で一番苦しいことは「子どもが病気になる」といいます。

活動の理念 支援活動の主旨

カラ西アフリカ農村自立協会（以後カラと略）の活動は、「住民が自主的に自立した生活を自ら構築するよう努力する」、それに対する支援活動です。そのためには「マリにあるものを使い、マリの技法でマリ人が行う、必要な材料・資材はマリで購入が可能な物を使う」。これらを徹底しました。日本から物を持ち込まない。このことが大前提です。

私が単独で村に住み、生活を共にして知ったことは、女性たちの積極性と勤勉なこと、やさしさ、親切心でした。妻は夫とは別々の財産を持ち、家族の健康・栄養、子どもの教育費は母親の負担でした。ですから母親は年間を通して確実に収入を得る必要があります。一般的に農村の女性・主婦が手にするのは、雨季に生産販売する農産物からの収入だけでした。

具体的な活動内容

1. 水を得る

最初に取り組んだのが井戸の設置で



② 井戸を囲んで野菜園を開設

した。私も村に住んで水を得るのに苦労しました。

井戸には2種類あり、一つは、井戸掘り職人による手掘りの井戸、通称浅井戸といい、地下27センチまでの掘削です。もう一つは、掘削会社に依頼して機械掘りによる手押しポンプ付きの井戸、通称深井戸です。深井戸は地下70センチ前後まで掘削し、先端に部品を取り付けて地下水脈から水をくみ上げ



③ コニナ村小学校林

ます。しかし、目に見えないところに設置する部品やその技法の確実性を確認できません。そのため信頼性の高い掘削会社を頼るしかありません。水を得られたことは、食生活の改善だけでなく、病気予防、手工芸品の製作、植林帯の造成も可能にします。井戸1本による裨益効果は、発展途上国では計り知れないと思いました。



④ カリテ油が原料の石鹼

2. 野菜栽培

これまででは、雨季に頼った野菜栽培でしたが、井戸の設置で一年中野菜栽培が可能になりました。食材が増え、気が付かないうちに栄養が改善され、余剰野菜の販売で女性たちは収入を得るようになりました。野菜園の運営管

理は女性委員会が行います。女性には強い味方となりました。

3. 木を植える

村の生活に薪や木炭となる木の伐採は必要なことです。しかし、山火事や薪商人による過剰伐採で木が次第に減っているのが現状です。カラ

は植栽した苗木が確実に活着するよう小学校専用の「学校林」を造成しました。育苗も指導しました。雨季に植栽した苗木に、乾季になると生徒たちは水やりをしますから、非常に活着率がよいのです。育てた木（ユーカーリなど）が大きくなると、建築用資材として販売し、学校の維持費に充てます。村では、5人体制で森林パトロール隊を組織し、夜間の盗伐を警戒して森林地帯を巡回するようにしました。

4. 女性適正技術の習得から女性貸付事業へと発展

女性の収入獲得の手段の一つに製作物の販売があります。その技法を「女性適正技術」で覚えます。カリテの油を原料とする石鹼の製造や、伝統的な染め物、刺繍、衣服の縫製などです。この技術を十分にいかして女性たちは収入を得られるようになりました。

委員会では、時間をかけて基本金を蓄え女性の貸付事業を開始しました。実はこの事業が提案された際、私は「自分たちで基本金を蓄えたらこれを許可する」と宣言していました。そして1年が過ぎた頃、女性委員会の代表が「村上、資金がたまったから貸付事業をしてもよいか」と許可を得に来ました。日本円で8000円くらいだったと思います。これは女性たちが共同で懸命に蓄えた資金です。私は涙が出るほど感激したのを記憶しています。確か2000年頃、2か村からスタートして現在は10か村以上に広がりました。利息も貸付期間も女性委員会で決めました。私とスタッフは、貸付金回収のときにときどき立ち会うだけです。女性委員会は蓄えた資金を利用し

て穀物製粉機を購入しました。これを使用することで女性の肉体的な負担が軽減されます。勿論使用は有料です。この製粉機の購入にも、村の女性委員会から資金の一部を出してもらいました。これは「与えられただけ」で終わらせないためです。

5. 識字学習の徹底と義務教育の普及

マリ識字教育振興庁が進めている識字教室を定期的開催しました。教室となる場所がない村には、教室を建設しました。小学校のない村では、この教室を、ある時間帯には小学校として使用しています。狭く土レンガ建築ですが、とても有効に利用されています。識字教師を育成し、村の人が仲間に見えるようになりました。女性の識字教師も誕生しました。今までは見なかったことですが、女性が人前で話をするようになったのです。

また、過去に政府が義務教育の徹底のために、村に建設させた村立の土レンガ建築の小学校が崩壊寸前の危険な状態になっていました。このような小

学校を日本の外務省からの助成金で建て替えました。嬉しいことに10年以前に建設した小学校から中学校建設の申請がありました。自宅から通えるところに中学校がないと、町へ下宿させるようになる、そうなるとお金もかかり子どもが不良になる、というのが中学校建設要請の理由でもありました。

もっともな話だと思いました。確実に人々が教育の重要なことを認知してきたことを知りました。

マリ政府は「村に小学校1校、パソコン1台」という政策を発表しましたが、実際は不可能でした。電気のない村にPCを、教師がいないのに小学校を、ということでした。

6. 衛生知識と病気予防の普及

識字教室で文字が読める人が多くなった頃を見計らって、公衆衛生知識の普及や季節的疾患に罹患することがないように注意を促すため、標示板を設置しました。文字は識字教室で習うバラバラ語です。その他、村を巡回してトイレの建設、幼児の体重測定、マラ



⑤ 識字教室で学ぶ女性たち

リア予防や腸内寄生虫の駆除に薬品の投与を実施しました。村の人たちが楽しむ楽隊を呼び前座を務めてもらい、

出稼ぎの若者が村に帰省する時期にエイズの予防活動も行い、エイズについての正しい知識を知ってもらいました。

識を母親が学び、子どもや家族の健康を守る、という基本的な知識を持つことです。

7. 村の女性の発展、助産師と健康普及員の誕生と「支援の成果と事業の移管」

村の女性たちが長い間、真摯に活

動を続けてきた結果、食材を生産し、部族語であっても文字を書ける人が増え、収入を得る道を覚ええました。適正技術によりそれぞれに適した好みの技術をいかして、収入を得ています。蓄えも個人用と委員会用に、決められた方法で蓄え、何の問題もなく順調に進んでいます。委員会ですべて相談して民主的に進めています。このような女性たちを見ると、かなりの団結力の強さを感じます。時間的に余裕も生まれませんでした。そのような女性たちの姿に、私はやっとマリに来る最大の目的だった医療の改善を進めていける時期が到来したのを感じました。

村の女性たちが長い間、真摯に活動が続けてきた結果、食材を生産し、部族語であっても文字を書ける人が増え、収入を得る道を覚ええました。適正技術によりそれぞれに適した好みの技術をいかして、収入を得ています。蓄えも個人用と委員会用に、決められた方法で蓄え、何の問題もなく順調に進んでいます。委員会ですべて相談して民主的に進めています。このような女性たちを見ると、かなりの団結力の強さを感じます。時間的に余裕も生まれませんでした。そのような女性たちの姿に、私はやっとマリに来る最大の目的だった医療の改善を進めていける時期が到来したのを感じました。

そして、女性が安心して出産ができるよう、村出身の助産師を誕生させることです。身近な場所に産院を開設して村が管理するのです。それが実現できる時期になったということです。やがてこれまで続けてきたいろいろな活動をカラの手から離す、つまりすべての管理を村の人たちに移行する時期がきたことを感じました。村のことは村の人たちが考え、助け合ってほしいと思われました。それに、支援する側にも限界があります。

2008年から新しく始めた村の女性への衛生教育や病気予防普及員育成会については、村から5人の女性を選出してもらいました。彼女たちの中には文字を読めない人が多いので、教材に「絵」を使いました。例えば、家の骨組みの絵を見せて、体の骨格造りに必要な栄養の話をするのです。このようにして育成した女性たちを「村の健康普及員」として認定し、村で指導す

それは、公衆衛生や病気予防の知



⑥ マラリア罹患注意の標示板

洗うときには石鹼を使いなさい」という指導で、下痢もなくなりました。非常に細かいことですが、効果を上げています。

助産師育成研修を終えた女性が新助産師として村に帰省するときに合わせて、待望の産院を開設しました。カラが建設材料を提供し、専門家を招いて村の人に建設を指導してもらいました。分娩台やベッド、器具・薬剤・薬品もそろえました。看護師については「村が給料をためて雇



⑦ 健康普及員が村で定例学習会開催

る体制をつくりました。過去には「予防注射をされると子どもが産めなくなる」というとんでもないデマが飛んでユニセフの予防接種を受ける人は稀でしたが、正しい知識が普及した結果100%の接種率になりました。「手を

いなさい」と言いました。村では3か月分の給料を蓄え、男性看護師をバマコから雇用しました。運営は村の管理委員会です。経理方法も指導しました。運営費には、産院の収入だけでなく、女性団体や青年団体が共同耕作地

で生産した穀物の販売収入を寄付しています。村全体に助けられ、守られている産院となりました。

この村の助産師の誕生は裨益効果が高く、「文字を覚えれば、女性も将来は職業にありつける」と気づき、その



⑧ 新規開設の産院、助産師と看護師

結果、女兒の就学率が男児を上回るようになりました。

女性の意識の高まりは、夫の意識も変えてきました。男尊女卑だった社会は女性を認めるようになり、家庭内暴力も減少したそうです。女性がそれまで担っていた役割を夫も負担するようになりました。家族計画のため夫婦そろって

産院に行くことや、子どもの予防接種にも多忙な母親に代わって父親が付き添う姿を見るようになりました。

以前、日本の公共団体から助成金をもらう際「何年たったらマリの人々は自立できますか？」と驚くような質問を受けたことがあります。自立できるかできないかは、支援する側の問題

でもあることを実体験で知りました。マリの人たちは非常に利口です。チャンスを与えて潜んでいる才能を引き出すことも我々の仕事だと思えました。ですから支援の成功、不成功は支援する側に多く原因があると確信しました。

自国の力で変わりゆくマリ

マリ共和国は、かつて西アフリカ諸国経済共同体に加入していましたが、2年前に脱退を表明し、2025年、正式に認められました。マリと東隣のブルキナファソ、ニジェールの2か国も脱退して3国で新しい組織・サハラ共同

体をつくりました。

マリ国内政府は過去数年間、大統領も決まらず、ずっと暫間大統領が国を統治してきました。2025年6月、この大統領がこの先5年間の任期で選挙なしで大統領に任命されました。またマリのもう一つの大きな問題は、イスラム原理主義者（ジハディスト）の襲撃が数年間続き、現在も後を絶たないことです。大統領はイスラム教信者ですが、彼は国民に対しては「イスラム教だけに固執することはなく、自由に宗教を選んでもよろしい」という柔軟な考えです。しかし、イスラム原理主義者の活動を後押ししていると言われる旧宗主国のフランスは、この大統領を好ましく思っていない。ついに2年前からフランスとは断交状態になっています。そして支援先をロシアに向け、ロシアから民間軍事会社「ワグネル」がマリに入ってきてマリ軍隊の指導をしているそうですが、効果がなく、襲撃やテロの発生回数が増えるばかりです。

近年、マリ政府は多くの若者を兵士

として雇用し、たくさんの武器を購入しています。戦力が強くなったので首都のバマコへはジハディストの襲撃はないということですが、しかしこの強力な軍の維持には巨額な経費が必要だと思います。これまでヨーロッパの国々から受けていた支援が断ち切られて、今は湾岸諸国から支援があります。

マリのスタッフに聞きますと、この費用（軍の維持費）はマリの税金で賄っていると言います。

マリの一番の収入は家畜を近隣の国に売ること、アフリカ第二の生産高であるコットン（綿花）の輸出です。加えて西側のギニア国境辺りの金（ゴールド）の産出。さらに近年は私がかつて一人でボランティアをしていた村の近くでリチュム鉱山が見つかりました。そのため、村の若者たちがそちらに出稼ぎに行き、村の若い力が減少するという状況になりました。

また、これまでは課税の対象でなかったものにも課税されるようになり、身近なものでは電話カードや国内での送金時に税金がかかるようになり

ました。鉱山の産出物からのマリの収益は、過去は20%でしたが、新大統領になり35%まで引き上がったということとです。国自体が自国で賄えるようになることは非常にいいことだと思いますが、国民が課税に耐えかねてクーデターを起こさなければいいと思いません。新大統領は、国民のためにいろいろな事業を実施しています。例えば、

学校建設と整備、病院建設（15か所）、保健センターや病院へのソーラーパネルの設置、井戸の掘削、食料の支援などを行っています。しかし、今現在、1日6時間の停電が続き、物価が高騰しています。2025年9月にはセネガルの首都ダカールとマリのバマコ間、そしてアビジャンとバマコ間の道路がジハディストの襲撃を受けて遮断されてしまったので、燃料が入ってきませんでした。一度はニジュールの軍隊が警備をし、82台のタンクローリーで燃料が運ばれましたが、現在も燃料不足が続いています。

私たちの活動地域もイスラム過激派、アルカイダの一部がサハラ砂漠か

ら南下してきて村に入り込み、大変な被害を被っています。日本のODAで建設した小学校も襲撃されました。いつ解決に向かうのか、「神のみぞ知る」ということです。

これまでカラが支援し、村人の努力が実り、多くの成果を上げてきた事業が、この先はどうなるか、非常に不安です。視察に行くこともできません。しかし、このような状況下でも産院・診療所は機能し、野菜栽培も実施されています。生きる道は閉ざされていません。

穏やかな状況に戻るのを祈るだけです。

（2025年12月18日・公開講演会）

筆者略歴（むらかみ・かずえ）

日本歯科大学卒業。歯科医師。日本歯科大学名誉博士。

著書『悩んでも迷っても道はひとつーマリ共和国の女性たちと共に生きた自立活動三〇年の軌跡』（2024年、小学館）。

会員彼は

東京電力 福島第一原子力発電所訪問記

会員 福島靖男

今から14年ほど前の2011年3月11日(金)14時46分、東北地方三陸沖を震源とするM9.0の巨大地震が発生した。直後に海底の地殻変動による大津波が発生、日本列島の太平洋沿岸の県を襲い死者・行方不明者2万2千人余り(震災関連死を含めて2026年3月1日現在)を出す大惨事となった。

この震災で発生した大津波により、福島県双葉町と大熊町の沿岸に所在する「東京電力福島第一原子力発電所(以下福島第一)」は全電源を喪失、ステーションブラックアウトの状態となった。そして、原子炉は制御不能、核燃料ペレットが原子力压力容器の底に落ち、炉心溶融、いわゆるメルトダウンが始まった。溶融した燃料集合体

の高熱により压力容器の底に穴が開き、压力容器の外側にある原子炉格納容器に漏れ出し、水と化学反応を起こし水素が発生した。この結果原子炉1、3、4号機が水素爆発を起こし、原子炉建屋・タービン建屋など周辺施設が大破、大量の放射性物質が大気に放出される事態を引き起こし、ピーク時には周辺住民16万人以上が避難する騒ぎとなった。放射能は東北・関東地方に及ぶ広範な地域を汚染、大きな社会問題となった。その後除染が進み多くの地域で避難の解除が進んだが、現在でも帰還困難区域が存在している。

これが福島第一の事故状況だが、私がかねてより事故後の原発の状況を見学したいと思い、幾度か見学の可能性

を探したが一般人の訪問はなかなか許されず、その情報はメディアの報道に頼るしかなかった。2025年の11月ようやく見学の許可が下り、福島第一を訪問することになった。一行40名は午前8時に観光バス1台で東京を出発、一路常磐自動車道を北上した。車中、東京電力提供の劇映画「Fukushima 50」を鑑賞。映画は地震の発生から原子炉のメルトダウンまでの詳細が描かれている大作で、渡辺謙演ずる福島第一の吉田昌郎所長と東電本社・政府との緊迫したやり取り、事故対応に当たる所員の機敏な活動など俳優陣の熱演で、津波の被災後原発内でのようなことが起こっていたかが理解できた。

11時過ぎには、近隣の「Jヴィレッジ」で昼食をとり、午後1時半「東京電力廃炉資料館」に到着した。ここで見学にあたり種々の注意事項があり、入所には厳しい本人確認と持ちものチェックがありスマホはもちろん飲食物やタバコも禁止、見学の証拠となる写真は東電が撮影した集合写真1枚だけとなった。



見学を終えた訪問団

資料館での座学は1時間ほど続き、燃料デブリの取り出し作業、核燃料の安定冷却、汚染水対策、処理水対策、発電所内の空間線量の説明などを見学ルートの説明があったが、廃炉作業はこれから30〜40年続き、1日の作業員数が4200人ほどと聞きびっくりした。

いよいよ福島第一に向かったが、見学開始までにはまだいくつかの関門があった。まず、再度の本人確認、靴の

履き替え、金属探知機を通過、最後に線量計の装着などがありようやく発電所内に入った。午後3時にマイクロバスで所内の見学に出発、途中目に入ったのは立ち並ぶ膨大な数のタンク群だった。1000基を超えるそうだが、1〜3号機のデブリを冷却した汚染水と浸水する汚染された地下水を貯蔵するタンクで、その隣にはその汚染水から大半の放射性物質を除去する「多核種除去設備」(ALPS)が設置されている。ご存じのように23年8月に処理水の海洋放出が始まったので、タンク群は減りつつあるようだ。

午後3時10分には高さ33メートルのグリーンデッキに到着、事故当時は運転停止中だった原子炉5、6号機を眼下に見下ろし、処理水排出の仕組みの説明を受け排出口などを遠望した。遙か太平洋を望み、穏やかな海面をフェリーがゆっくりと航行していた。次いで、グリーンデッキから歩いて移動、水素爆発で破損した原子炉1号機から4号機を眼前にした。福島第一の原子炉はすべて米国ゼネラルエレクトロニッ

ク(GE)社製の沸騰水型軽水炉で、いちばん古い1号機は1971年に運転を開始している。破損した原子炉の見学が最終目的だったが、骨組みだけとなった建屋の無残な姿を目の当たりにして感無量だった。各原子炉は廃炉に向け放射能の飛散を防ぐため、大型カバーで囲う作業が進んでいるようだが、各原子炉には巨大なクレーンが1機ずつ立っているのが印象に残った。

すでに事故から15年を経ており、新聞・テレビなどによる記事や映像の記憶もあり既視感があったが、実物は圧倒的な存在感で迫ってきた。ここで記念撮影をしたのが唯一の訪問の証となった。ここでの線量はさすがに高く、50 μ Sv(マイクロシーベルト)を示した。所内の見学は1時間半ほどで終わり事務所に戻ったが、線量計の数値は0・1 μ Svと低く被曝はなかった。

かつて福島第一は森に囲まれた静かな環境だったそうだが、今の所内は木々が姿を消し、発電機の残骸など機材が至るところに積まれており、多くの作業員が行き交っていたが、絶える

ことのない汚染水の処理、何よりも880トと言われる原子炉の底に溜まった「燃料デブリ」の取り出しなど、これから30年も40年も続くのかと思うと、感慨を新たにした。

帰りは、国道6号線を南下。道の両側には商店やコンビニなども点在しているものの、来るときには気づかなかったが、よく見ると、人けのない廃墟が続いており、ここが「帰還困難区域」であることを思い知らされた。帰りはただひたすら常磐自動車道を南下、午後8時30分には現実に戻った。

ところで、我が国の原子力平和利用は1955年に制定された「原子力基本法」に始まり、翌年には茨城県東海村に「日本原子力研究所（原研）」、および「原子燃料公社（原燃）」が設立され、原子力発電の研究が開始された。そして66年には「東海発電所」が営業運転を開始し、我が国における原発元年となった。

その後、原発は燃料が廉価であること、CO₂を出さないことなどもあり、原発の建設は全国に広がり、最盛

期には17か所・54基の原発が稼働しており、事故直前の2010年には電力の30%近くを担っていた。前述の福島第一は1971年に営業開始以来、事故を起こしたことはなく首都圏に電力を送り続け、87年には地元小学生の応募作品である「原子力明るい未来のエネルギー」の標語が地元の双葉町の商店街入り口に掲げられ（現在は撤去）、平和の電力であることが強調された。

しかし、1979年に米国のスリーマイル島原発で放射能漏れ事故が起き、86年にはソ連（当時。現ウクライナ）のチェルノブイリ原発の爆発事故でその危険性が表面化した。その悲惨な状況はノーベル文学賞を受賞したスベトラーナ・アレクシエービッチの著書『チェルノブイリの祈り』に詳しい。我が国においても美浜原発の配管破損事故や高速増殖原型炉「もんじゅ」のナトリウム漏れなど重大事故が頻発、99年には東海村の核燃料加工施設「JCO」で、あろうことかウラン燃料の濃縮中、掌中で臨界に達するという前代未聞の事故が起こった。こ

の工場ではウラン濃縮作業がバケツと柄杓により行われるという、最先端産業である原子力関連企業にあるまじき実体が暴露された。

その後、原発の増加により必然的に使用済み核燃料も増加、それまで外国に依存していた再処理を国内で行う必要が生じ、93年に青森県の六ヶ所村に再処理施設の建設が決定した。しかし、相次ぐトラブルでいまだに稼働できない状況が続いており、核廃棄物は各原発の敷地内に集積している。そのためか、原発は「トイレのないマンション」とやゆされる始末で核廃棄物の処理が大きな問題となっている。このように原子力発電の技術はいまだ十分に確立されたとは言えない状況だ。

元々、日本列島は狭隘な国土の上に地下には四つのプレートが重なり、地上ではフォッサマグナや中央構造線が走るひび割れた不安定な島であり、地震や火山噴火も多く、原子力発電所の建設には不向きではないかと言われていた。しかし、エネルギー小国の我が国にとってはこのような地学的な不都

合にもかかわらず、政府の原発推進の姿勢は変わっていない。新しい「第7次エネルギー基本計画」では「特定の電源や燃料源に過度に依存しない」との姿勢で2040年度の電源構成目標値は、再生可能エネルギーが4〜5割となっているが、原子力発電も2割程度を見込んでいる。福島第一の事故以降、「原子力規制委員会」は原発の設置と再稼働について審査基準を格段に強化し、多くの原発は稼働が停止されており、現時点で24基が廃止、14基が再稼働、電源構成比は8・5%（2023年）となっている。

さて、このような状況の中で今後、「原子力の平和利用」をどのように推進すべきなのだろうか。私は「核エネルギー」開発については忌避感を持っているわけではない。昨今の状況では現在の産業は多大な電気エネルギーを必要としており、われわれの生活も電気エネルギーの使用を基本に成り立っている。これらの電力需要を賄うには、多様なエネルギー源を活用する必要があり、原発への依存の是非も検討しな

ければならないのではないだろうか。ここで私が最も懸念するのは福島第一の事故以来、大学や研究機関での原子力工学や核物理学研究の規模縮小があり、現場では原子炉の運転停止から技術の継承が途絶えつつある。もとより、原子力産業は多くの研究成果と技術の集積の上に成り立っている巨大産業であり、報道によれば原発は1千万点もの部品からなり、その研究と技術の蓄積・継承が必須であると思われる。

ここで過去の例を見れば、「三菱航空機」が推進した国産ジェット旅客機（MRJ）の開発失敗がある。我が国は敗戦により、航空機の開発を連合国から禁止され、多くの技術の集積であるジェット旅客機は国家プロジェクトにもかかわらず完成を見なかった。卑近な例では衛星打ち上げロケット「H3」の開発にも言えることで、今回の打ち上げ失敗で宇宙開発の分野で我が国は他国に後れを取っていることは明白である。

このように研究と技術を集積し、継承していく巨大プロジェクトでは、研

究・開発の中断や遅れを生ずると、追いつくことが難しいことがわかる。エネルギー小国の日本にとって核エネルギーの開発は間違いなく国家プロジェクトであり、福島第一のデブリの取り出し、廃炉の手順、使用済み核燃料の再処理など課題は山積していることから、事故の教訓は次世代核エネルギーの研究・開発の糧にするべきではないだろうか。

みんなの写真館への投稿をお待ちします

裏表紙（表4）に掲載する写真、図画を募集しています。写真、図画はいずれも表題を付けてください。また写真については表題だけではなく、300字程度の説明文を付けてください。

国内・海外旅行、思い出のショット、さまざまな記念写真、日常生活のひとこま……、テーマは問いません。原稿をメール、または郵送で事務局へお送りください。

陶陶俳壇

会 句 陶 陶 陶
結 果
2026年3月

兼題 「天候」

馬場由紀子

霾や質屋の蔵の解体音

松島二三四

◎由紀子 質屋という金融機関に頼っていた時代の終りを思わせる。

嫗住む袋小路や春一番

〃

◎明良 袋小路と春一番の吹き抜ける対比が面白い。

◎善一 〇えいこ 嫗に注目しました。狭くて暗い印象の袋小路ですが、春一番が明るくしてくれたように思います。

◎由紀子 昔から下町に住んで、小路と共に年を経り嫗となった。「袋小路」の措辞が年老いた者の遣り場のなさを思わせるかのようで切なくもあるが、我が身にも速からずやってくるのである。これが現実、されどその中にやさやかな人情を見出したいものだ。

梅の花遅れて咲けど毅然たり

瀬崎明良

◎善一 「毅然たり」の文句によって桃の花が一層美しく思った次第。

◎明良 周りでは桜花を葉が覆い先に咲くべき梅がやっと咲く異常な気候ですがすつきりと立った枝に梅が花を咲かせました。

発表会孫のピアノは子守唄

〃

◎京 実感がこもっている。

曇り空梅の香残る庭日暮

日野正子

◎紅杓 清少納言の『枕草子』に「春は曙」とある。香りは朝が最も強く午後には薄れると

〇明良 私も大好きです。愛犬ベルは最後のシベリア抑留者1025名を乗せた掃蕩船與安丸を追って厳寒の海に飛び込んだクロの仔だったと信じています。公園で私のボートを追って泳いで来たのは血筋だった。

◎由紀子 「天候」で「いぬ」と読ませました。

花冷やをうしに残る背の傷

〃

◎二三四 牛を見られる場所はそうなく、作者の思い出の中かもしれません。農耕を共にしている雄牛の背中の傷はどうしてできたのか。傷について語ることもなく、花冷えの空の下黙々と春耕につき従う牛の姿は頼もしく、農夫との絆までもが感じられます。

◎正堂 花冷えのする或日に牝牛の背に傷をみつけた。闘牛での相手の角の痕だろうか。激しい勇姿が思い浮かぶ。

◎正子 重い農耕による傷でしょうか。働き者を労わる気持ちが伝わってきます。「花冷」が哀しみを誘います。

水涸れて底現れり春のダム

橋本紅杓

◎善一 2026年春は、記録的な少雨により、西日本・東海地方を中心に深刻なダム渇水が発生しているそうです。

◎京 東風吹くや紅梅凜と紺碧の空

◎由紀子 美しさの中に清々しさを感じる。ただ、「東風」と「紅梅」の重複は句が重たくなるので「紺碧の空や紅梅凜として」といった感じで季重なりを避ける方が句のイメージを確実に表現できると思う。

◎明良 胡座にはいつも亡犬ある朧かな

馬場由紀子

◎正子 「朧」に全体がやさしく包まれています。虹を渡ってしまった愛犬が大好きだった作者の胡座の中。胡座をかくと愛犬もそこに戻ってくるのですね。朧の柔らかさと愛犬を思う心情がよへ合います。

◎二三四 慢心して油断をするときには亡犬が現れる朧状態である。愛犬への思いが冷めやらなかったのですね。

◎紅杓

前号4月発行号の兼題「立冬」は誤りで、正しくは「外国」でした。

慎んでお詫びし訂正いたします。

前号4月発行号の兼題「立冬」は誤りで、正しくは「外国」でした。慎んでお詫びし訂正いたします。

*旧かな、新かな、作者の意図に任せる。

中国

ウマツチンク

編・訳 上松玲子

幽霊デリバリー店の取締り

「よくやった!」「ついに幽霊デリバリーの巢を暴いた!」「ぜひ全国で広めてほしい!」最近、河南省鄭州市の市場監督管理局が実施している「幽霊フードデリバリー店」(実体不明で管理ができず、衛生状態に懸念があるフードデリバリー業者)の摘発作戦に寄せられた賞賛と期待の声だ。食品配達員が仕事中にみつけた問題のあるデリバリー店をスマホで撮影して通報するというものだ。

食品配達員たちは毎日、街の路地や通りを行き来しているうちに、どこのどの店が清潔で、どの店のものが「とても食べられない」かを知ることがになる。この作戦では、写真が証拠となり、配達員による監視モデルの有効性が示された。配達員にとっては、問題のある店舗を通報することで報酬を得られるだけでなく、

フードデリバリー業界の改善に貢献でき、職業としての誇りも高まる。消費者はより安心して利用できるようになる。業界にとっては、問題のある店舗の発見と改善を通して、規則を守らない業者の市場退出を促し、業界全体を規範化し、品質向上へと導く効果がある。

〔光明ネット〕2026年1月27日

資格認証の偽造ビジネス

報道によると、「無形文化遺産(原文は非物質文化遺産)」

の認定証書がネット上で売られており、数百元の「協会証書」から数万元の「省級名人」という称号まで、偽造ビジネスチェーンが形成されているという。

資格の偽造自体は珍しくない。ある資格が社会的に価値ありとなると偽造の需要や関連する違法ビジネスが生まれる。偽「看板」を利用して商業的利益を得ようとする人々の需要を狙うのは「無形文化遺産」の名を冠した促進会、研究院、文化関連会社などであり、公式の無形文化遺産認定機関ではない。法律では、条件を満たす市民は文化・観光主管部門に申請して、無形文化遺産の代表的継承者となることができ、費用は一切かからない。一般人が金を払えば短期間で「無形文化遺産継承者」になれるというのは、完全な詐欺と言ってよい。

中国は国として無形文化遺産の代表的項目や代表的継承者などの登録制度を設けている。これは無形文化遺産を保護し、民族の文化的記憶を守るためである。無形文化遺産の認定証を偽造するビジネスは国家の利益と社会の公共利益を損なうものだ。

〔法治日報〕2026年2月9日

春節の逆方向移動

今年の春節(旧正月)、北京では、故宮や頤和園、万里の長城、円明園の新春ランタンプェスティバル、新年の廟会(縁日)などの主要観光地やイベントにそれぞれ1億人が集まったと誇張されるほど、人出の多さが話題となった。上海、深圳、広州、重慶などの都市でも同様だ。なぜこのように多くの人が集まったのか。その一因に、都市で働く若者が帰省するのではなく、逆に地方の親たちが子どもに会うために都市を訪れて一緒に

に過ごす「逆方向の春節」現象がある。

春節前後、北京、上海、広州、深圳、重慶、杭州などの大都市行き航空券の予約数は前年同期比で84%増加し、大晦日の前日には60歳以上の宿泊者が前日に比べ6割も増えた。この期間、子どもの孝行心だけでなく、都市もその受け入れ能力や心遣いが試された。高齢者が快適に宿泊できたのか、食事や移動はスムーズにできたのかどうかは、平常時、若者が都市に定着できるかどうかの指標にもなる。

『経済日報』2026年2月25日

新時代の定番品

近年の春節（旧正月）の贈答品などの年末商戦では、従来のタバコ・酒・砂糖・お茶などの「老三様（昔ながらの定番品）」は徐々に影が薄くなり、代わりに健康・自然・スマート関連商品が新しい三

大人気商品「新三様」として注目を集めている。

商業データを見ると、年末年始のわずか2日間で、主要プラットフォームにおけるスマートウェアラブル端末の売上は前年同期比で1・3倍に増加。血圧計や血糖値計は60%以上増、オーガニック食品も52%増と、健康志向や自然志向、利便性を追求する消費傾向が顕著になった。

この変化は、消費者の意識が全面的にアップデートされつつあることを示している。

「新三様」の人気は、中国製造業の新たな成長を促す。企業や関連部門は、研究開発投資を強化し、中核技術の開発に注力することで、中国製造業を進化させることが求められている。

『新華日報』2026年2月25日

銀髪留学

近年、50歳から80歳と高齢

でありながら海を越え外国留学に挑戦している人たちが一定数いる。イタリア・フィレンツェの素描教室でも、スペイン・バルセロナの語学クラスでも、彼らの真剣に学ぶ姿は「定年退職」ということばに「新たな始まり」という意味を加えている。

中国国内では、50歳以上向けの学位取得コースや編入制度はほとんど整備されておらず、老年大学も基礎的内容に偏っている。その中で高齢者が海外に学びの場を求める状況は、彼らが創造的・専門的な学習機会を求めていることを示しており、国内の大学も退職者向けのコースを開設する必要性を示している。

『北京晩報』2026年2月25日

ディープフェイクとどう戦う

先日、俳優の王勁松の顔が生成AIで精巧に偽造され、詐欺動画に使われた事件が起

きた。映像は極めてリアルで、本人も「家族でさえ見分けがつかない」と驚いたという。この出来事は、AI生成画像による詐欺の危険性をあらためて浮き彫りにした。

実際、中国では2025年9月1日から「人工知能生成内容内容標識弁法」が施行され、AI生成コンテンツには表示を付けることが義務づけられた。しかし、施行から半年が過ぎても、短編動画や記事、ライブ配信などのAI生成コンテンツが表示なしで流通する例が依然として多い。さらに、一部の違法行為は地下に潜り込み、ディープフェイク技術と違法ビジネスが結びつくケースもある。

問題の根本は、規制と管理の仕組みの遅れにある。違法行為を識別し、追跡し、刑罰を科す仕組みの整備が急務だ。

『錢江晩報』2026年3月5日



◆令和7年度第12回理事会の議題（3月27日開催）

●審議事項

- ①令和8年度予算が承認された。
- ②役員が病気療養等に伴い職務を果たせなくなった場合の対応策について承認された。
- ③外部監査については、他の対策を取ることに必要ないことが承認された。

●報告事項

- ①善隣誌は事情によりページ数を減らして発行を継続中。
- ②植林事業は日中関係が改善するまで中断せざるをえない。
- ③東北を知り尽くそうを掲げ、ハルピン、瀋陽、長春、大連、旅順の主要都市を視察していく（東北委員会）。

◆「善隣会館台所情報報告会」開催

日時 5月14日（木）

5月21日（木）

いずれも午前11時から

会場 当協会5階会議室

報告者 佐藤嘉信理事

なお、会員でまだ聴かれていない方が対象です。

（事務局長 増野亨）

会員だより

◎新会員

〔正会員〕藤岡竜志氏／荒木義修氏／山谷悦子氏／林原学氏

◎訃報

村瀬廣氏（87歳）
令和8年4月16日逝去
謹んで哀悼の意を表します

同好会だより

〈陶陶句会〉馬場由紀子先生
毎月第2水曜日にオンラインで句会を開催。

〈陶謡会〉松木千俊先生

第2火曜日午後2時から。興味のある方は事務局へご連絡ください。

〈一石会〉第2土曜日午前11時

から、7階談話室で碁会を開催。

参加希望の方は、前々日（木曜

日）までにメールで幹事（瀬崎明

aseken2000@gmail.com）まで

ご連絡ください。

みんなの写真館

ホイアンの夜景（表紙）

先月、ベトナムのホイアンを訪れました。ホイアンは16世紀から19世紀にかけて、東南アジアや東アジア、さらにはヨーロッパ諸国との交易の拠点として繁栄しました。トゥボン川沿いに位置し、海から川を通じて中心部まで容易にアクセスできたため、国際的な港町「ファイフォ」として発展しました。特に旧市街は、1100以上の木造建築で構成され、17、18世紀の伝統的な町並みが良好な状態で残っています。写真は現代まで継承されたランタン祭りという伝統行事です。これらの行事はホイアンの「生きた歴史博物館」としての価値を高めています。（姜晋如）

羽根木公園（表4）

2月下旬、自宅近くの「羽根木公園」に行きました。公園の土地は1965年に東京都から世田谷区管理となり1967年から「梅」の植林を始め6種類の梅の木が植えられています。八重寒梅、八重野梅、白加賀など670本の梅林（紅梅約280本、白梅約390本）は植林開始から60年以上経ち、2月下旬は満開となり「せたがや梅まつり」が開催されます。公園内は梅の他、桜や銀杏も植えられています。昭和期以降に鉄道王・根津嘉一郎の屋敷から東京府（市）所有となりました。戦前は地元では「根津山」と呼ばれていました。広大な世田谷区（5805鈔）の北東部、経堂と下北沢の中間地点です。（村田嘉明）

2026年5月の行事予定

- 7日(木) 14:00 公開 第4回 対面&オンライン講演会
「イラン問題+アメリカの関与について」(仮題)
立山良司氏(防衛大学校名誉教授)
- 9日(土) 11:00 一石会囲碁例会(於7階談話室)
- 12日(火) 14:00 謡曲会(松木千俊先生お稽古)
- 13日(水) 13:00 陶陶句会(Zoom)
兼題「瞑想して一句」および当季雑詠
- 14日(木) 14:00 公開 第5回 講演会(対面のみ)
「国家間競争の時代におけるイノベーションの勝ち筋」
西本淳哉氏(機械振興協会副会長・技術研究所長、元経済産業省
技術統括審議官)
- 15日(金) 14:00 21世紀アジア塾
矢吹晋(当協会顧問・横浜市立大学名誉教授)『相互不信』の合評
会(対面のみ)
発表者 諏訪哲郎氏(当協会会員・学習院大学名誉教授)・渡辺浩
平氏(北海道大学名誉教授)
- 21日(木) 14:00 公開 第6回 対面&オンライン講演会
「在日韓国人や諸外国の在日外国人の、日本における相互平等主義
について」(仮題)
田中宏氏(一橋大学名誉教授)
- 29日(金) 13:30 第15回 定時社員総会

5月の会議予定

8日(金) 14:00	講演委員会	20日(水) 13:00	国際交流委員会
12日(火) 13:00	理事会	20日(水) 15:00	広報委員会
12日(火) 15:30	環境委員会	27日(水) 13:30	東北委員会

※下線は通常日程に変更あり。

【6月初めの講演会予定】

- 11日(木) 14:00 公開 第7回 対面&オンライン講演会
「アフリカ大陸 希望の大陸? 絶望の大陸?」
飯山常成氏(元ジンバブエ特命全権大使)



みんなの 写真館

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）